

視覚障がい

障がいの特性

視覚障がいとは、視力を中心とする「見ること」に関する障がいです。この障がいは、角膜や水晶体、眼球内の液体や網膜、それに神経や心理的状況なども加味されて障がいが多岐に及ぶことになり、また、失明の時期や原因によっても多様な相違が出現します。こうしたことに十分に配慮した対応が必要となります。様々な症状を簡便に表示すると以下のとおりです。

【全盲1】

文字どおり全く光を感知しない状態です。太陽を凝視しても全く光度を感じません。眼球摘出や網膜の完全破損などが原因となることが多いです。

【全盲2】

外光は全く感知しないものの、眼前は明るく感じます。したがって、太陽を見ても、暗室にいてもその明るい感覚は同様です。

【光覚1】

強い光線（太陽や照度の高い人工光）を眼球を通して感じます。外光から明度を感じていますが物体は見えません。この段階では色彩は判断できません。

【光覚2】

いわゆる普通の光が感知できます。強い光を直接当てると「まぶしい」と感じます。色彩も不明瞭ながら区別できるため、物体をぼんやりながら認識し得ます。視力を使っての単独歩行はできませんが、光を頼りに進むことが可能なこともあります。

【光覚3】

明暗を確実に感知し、色彩の鮮明なものは見分けられます。誘導用の黄色いブロックをたどることが可能ですが、階段や段差、物体の確実な認識、信号の色などは不十分です。

【弱視1】

人物の顔は判別できませんが、姿は見えます。条件がよければ信号が見えます。明るい所から建物内に入るとしばらく何も見えないことが多いです。複雑でなければ単独歩行は可能ですが、道路上の障がい物の全てが見えるわけではなく、階段はスロープ状に見えてしまいます。かなり大きな文字なら読むことができますが、新聞などは読めません。

【弱視2】

同色系の色彩の判別はしにくいですが、鮮明であればかなり区別できます。単独歩行は日常生活に不便のない程度に可能ですが、未知の所を捜しながらの移動は困難です。少し大きい文字はそのまま読み、拡大鏡などでかなり読むことができます。但し、枠内に記入することは困難です。

【弱視3】

日常生活にはそれほど不自由を感じませんが、バスなどの案内板や時刻表のように離れた掲示を読むことは困難です。昼間はかなり視力がありながら、照度の低い場所や夕暮れになると全盲に近いほど見えなくなる人も多くいます。反対に、昼間よりも夜間のほうが見やすい人が少数ながらいいます。